

SFC 学会 研究助成金 成果報告書 (D)研究調査・フィールドワーク

申請時活動名称：死者への感情・意識を通して見る被爆記憶継承の実態 ～当事者不在の継承のために～

氏名：森吉 蓉子 所属先：政策・メディア研究科修士課程 2 年

1. 活動目的・背景

日本の被爆者の平均年齢が 85 歳を超えた今日、被爆体験の継承が喫緊の課題である。存命する被爆者がいなくなる未来は、確実に迫っている。

被爆都市・広島市は、2012 年に「被爆体験伝承者養成事業」を開始した。これは、意欲のある非被爆者へと、被爆体験を語り継がせようとする試みであった。長崎市は、2014 年に「家族証言者」の、2016 年に「交流証言者」の育成を開始した。2022 年になると、広島市が「家族伝承者養成事業」を開始した。

これまで、非被爆者の語り手達の経緯、活動の際に行っている工夫、継承の意義についてどう考えているかといった価値観まで、詳細な実態を調査した例は少ない。加えて、両市の事業においては被爆者の生存が必須であるが、被爆者不在の社会を見据えた継承方法の確立は、具体的になされていない。

本研究では、非被爆者の語り手達の実態、および被爆者不在の社会で、特に非被爆者の語り手育成事業を継続するために必要なこと、以上 2 点を明らかにしたい。

2. 活動内容

2.1. インタビュー調査

広島市 市民局 国際平和推進部 平和推進課、広島市平和祈念資料館 啓発課、公益財団法人 長崎平和推進協会 継承課に調査協力をしていただいた。事業の担当者計 4 名、被爆者 1 名（長崎市継承部会会員）、非被爆者の語り手[以下、「語り手」]計 27 名（広島：17 名、長崎：10 名）へ、非構造化インタビューを行った。形式は、対面、Zoom、後日の追加質問はメールで行った。

2.2. 参与観察調査

本研究では、参与観察の対象は広島市「被爆体験伝承者養成事業」とした。当事業は開始から 10 年経過しており、制度の方針や進め方が確立されている可能性が高いこと、先行研究で多く取り上げられることが主な理由である。筆者は第 12 期生として参加し、被爆者・新井俊一郎氏(92)のグループに入った。

3. 活動結果

3.1. インタビュー調査

以下は、インタビュー調査の実施日、場所、形式、対象者、実施時間数の一覧である。

実施日	場所	形式	対象者	実施時間数
2023 年 4 月 27 日	広島市	対面	事業担当者 2 名	約 1 時間半
2023 年 5 月 12 日,6 月 9 日	東京都	対面	語り手 1 名	計 5 時間
2023 年 6 月 19~25 日	長崎市	対面	事業担当者 2 名、語り手 9 名、被爆者 1 名	計 19 時間

2023年7月12~19日	広島市	対面	語り手11名	計16時間
2023年9月10, 11, 23, 24日	—	Zoom	語り手4名	計6時間半
2023年9月27日~10月1日	長崎市	対面	語り手3名	計4時間半
2023年10月9日	—	Zoom	語り手1名	約1時間半

インタビュー後は、対象者の発言を質問項目ごとに要約し、下位コード・上位コードを作成した。質問項目とそれに対する回答の一部（上位コード）を、以下に示す。

質問	回答（上位コード）
①なぜ語り手になろうと思ったのか？そのきっかけ	事業参加前からの活動、親族又は自身が被爆者
②講話の際に、特段工夫していることは何か？	視覚・音声情報の多用、正確性の重視
③被爆者不在の継承において必要なこと・重要なことは何だと考えるか？	研修内容の更新、原稿作成時の工夫
④なぜ被爆体験は、これからも世界へ継承されなければならないと考えるか？	核使用抑止、戦争抑止、被爆被害の認知
⑤被爆体験を継承する、あなたにとっての意味は何か？	個人の思い・目的、自身の存在意義・使命

3.2. 参与観察

計2回、広島市平和推進課から提示された研修に参加した。1回目は新井俊一郎氏との初回研修、2回目は「話法技術の習得講座（基礎編・応用編）」であった。以下は、参加の日時、場所、開催時間数である。

日時	場所	開催時間数
2023年8月24日 13:30~17:00	広島平和記念資料館 会議室2	3時間半
2023年10月12日 13:30~15:30 13日 10:00~12:00	広島平和祈念資料館 会議室2	計4時間

新井氏の初回研修では、初めに平和推進課課長から、「最前線で広島代表として」伝承者は存在するということが告げられた。新井氏の研修は講義形式で、筆者を含め14名と少なくない人数が参加した。参加者の中には、被爆者の親族、自身も被爆者、広島県外の出身者、既に伝承者として活動している者が居た。新井氏は、「これが自分にとって最後の研修」と宣言、「悲劇の中学1年生」というテーマで開始した。

「話法技術の習得講座」では、緊張しないための心構え、早口言葉の練習、口を動かす練習、マイクの使い方が教授された。講師は、話し方に精通する元アナウンサーであった。

初回研修と話法技術の習得講座、両方で互いの自己紹介の場が設けられた。しかし、他の被爆者のグループの研修生や、語り手達との交流の場は持たれなかった。12期生の研修は、今後は被爆者ごとのグループで随時行われる。市が立ち合い、取り仕切る研修は「話法技術の習得講座」をもって終了した。

4. 謝辞

本研究へご協力くださった広島市平和推進課、広島平和記念資料館啓発課、公益財団法人長崎平和推進協会、被爆者の方、語り手の方々へ、そして本研究への助成をくださった慶應SFC学会に、深く感謝を申し上げたい。